

じょうこうじ

# 掟光寺だより

令和6年  
8月号

## 8月の行事案内

● 4日(日) 7時〜

「無縁墓そうじ」

● 12日(月) 13時半〜

「盂蘭盆会・施餓鬼会」

● 13日 「寺墓参り」午前中

「盆棚経」 14時〜

● 14日 「盆棚経」 6時半〜

15日 「盆棚経」 7時〜



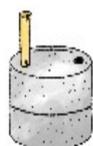
## 「お盆」は自分を振り返る

今年もお盆の時期がやってきました。お盆は「地獄の釜の蓋があく」という言葉があるようにあの世とこの世が近くなる時節です。古来から亡くなられた故人や先祖が帰ってくると考えられ、お仏壇の飾付けやお供え、お墓の掃除などされる方が多いでしょう。先立た今は亡き故人や先祖を偲ぶこと

で、いのちが続き今自分が生きて

いること、周りのいのちに助けられて、いることの「有難さ」や様々な縁が繋がって世の中が巡る「不可思議さ」を感じることでしよう。これは、自分自身を見つめ直し、より善く生きるためのきっかけになります。仏教では、より善く生きるために「こころ」、特に「欲」というものをいかにコントロールできるかを大切にしています。そこで、今回は「塩ふきうす」という昔話を紹介します。

### 【塩ふきうす】



百姓の兄弟がいた。兄は欲張りで大きな家に住み、弟は正直者だったが貧乏だった。

年の暮れに、弟は米と味噌を借りて兄の家に行くが、欲張りな兄は貸してくれなかった。仕方なくとぼとぼ歩いてみると老人が声をかけてきた。その老人は弟にこの先の洞穴に行つて石でできた動く物を持つてくるようにと言う。

弟は言われるままに、祠のそばの暗い穴蔵に入ると、石臼があったのでそれを持って出てきた。老人が「それはなんでも欲しいものが出てくる石臼じゃ。右に回すと欲しいものがでて、左に回すと止まる」と言つて姿を消した。

弟はからかわれているのだろうと思いつつ、石臼を家に持って帰り、さっそく「米、出ろ。米、出ろ。」と言つて石臼を回すと、米がどんどん出てきた。こうして弟は裕福な長者になり、他の貧しい人達にも石臼から出たものを分け与えていた。

弟が急に長者になったことに不思議に思った兄は、秘密をかぎつけて石臼を盗み出し、船に乗って海を越えて向こうの国で大金持ちになろうと思った。弟の家から持ってきた饅頭を食べたあと、塩が欲しくなり、さっそく石臼を回して塩を出したが、止め方を知らなかった。船は塩の重さで沈んでしまった。

今でも石臼は海の底で塩を出し続けているという。

（引用）まんが日本昔ばなしくデータベース〜NONO 塩ふきうす



この話は小さい頃、なぜ海の水は辛いのか？というお話で聞いたことがある人もいるのではないのでしょうか。

正直者で素直な弟は人助けをして裕福になった一方で、欲張りな兄は石臼とともに海に沈んでしまふという二人が対照的です。

この話の中に出てくる塩は私たちの「欲望」を表しているように思います。塩が出続けることで船が沈む姿はまさに欲に溺れた私たちの姿ではないでしょうか。あれも欲しい、これも欲しい、もっと欲しい。と際限なく膨れ上がる気持ちが欲であり、この欲望の心は石うすから出続ける塩のように私達からあふれ出続けるのです。塩が出続ければ船が沈むように、欲望が出続ければ私達も自分自身が出す欲望によってついには人生が沈んでしまうこともあります。

この話は私たちの欲望に終わりが無いことを表し、欲張りな兄が石うすの止め方を知らなかったが、船ごと沈んだように、私達も欲望の心の止め方を知らなくて大変なことになりませよと警鐘を鳴らしているのではないのでしょうか。

